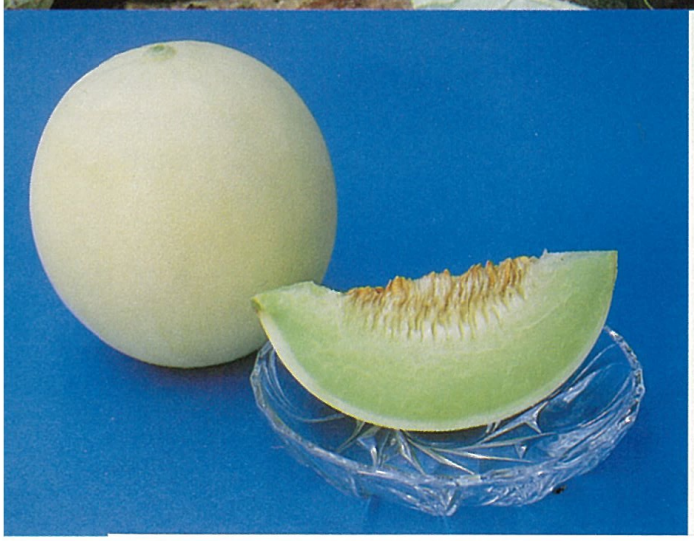
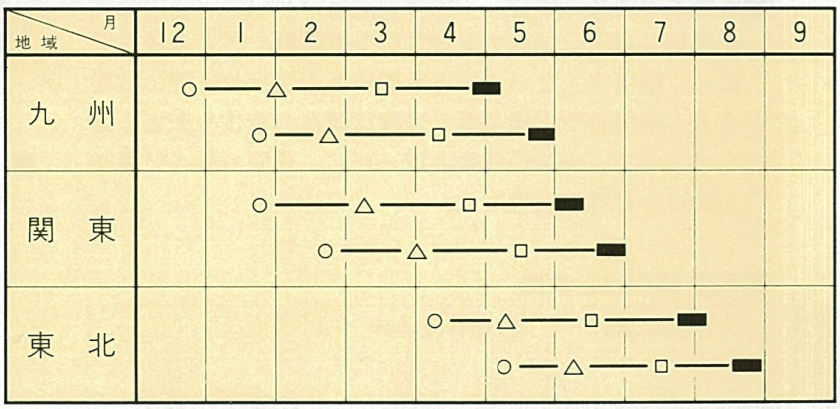
ハウス・トンネル春作這栽培用、早生・高糖度で日持のよい白皮緑肉種

ホームメロン グリム

特性と栽培方法



第1図 標準作型



○は種　△定植　□着果　■収穫

公益財団法人　園芸植物育種研究所

〒270-2221　千葉県松戸市紙敷 2-5-1　TEL.047-387-3827　FAX.047-386-1455

ホームメロン グリム 〈特性と栽培方法〉

育成経過

昭和44年に発表したアイボリーは、白皮緑肉のメロンとして良くできた果実は外観、品質共に高い評価を得たが、晩生で雌花の着生、着果が不安定等いくつかの欠点を持っていて、広く普及するに至らなかった。これらの改良を主目的とし、着果が安定し、早生で高糖度、日持が良く安定した肉質の白皮メロンとして育成した品種で、昭和61年度に命名発表した。
育種素材として、台湾導入系、ブルガリヤ導入系、しらゆき、ホームランスター等を使用し育成した。

特　性

○白皮、緑肉、果形はやや腰高で、果重は1.0～1.2kg。
○成熟期間　43～45日。
○標準糖度(Brix) 16～18%、好条件だと20%くらいとなる。
○果肉は厚く、皮の近くまで均質で肉質は緻密。
○発酵性、胎座のくずれはほとんどなく、室温で15日前後の日持があり、貯蔵、輸送性にすぐれる。
○雌花の着生、着果が安定し、ホルモン着果でも品質の低下は少ない。

栽培の要点

■**作型と栽培様式**　ハウスまたはトンネル(270cm以上)の春作這栽培、子づる2本仕立、1つる2果、株4果穫りを基本とする(第2図参照)。作型は第1図を標準とし、無理な早まきはしない。

■**育苗**　発芽適温は28～30℃(床温)。発芽時は胚軸が長く子葉も小さいので弱々しく見えるが徐々に草勢を増すので過保護にならないよう管理する。定植適期は9cm鉢で本葉2.5枚(活着後摘心)12cm鉢で3.5枚(摘心して定植)で老化苗にならないうちに定植する。

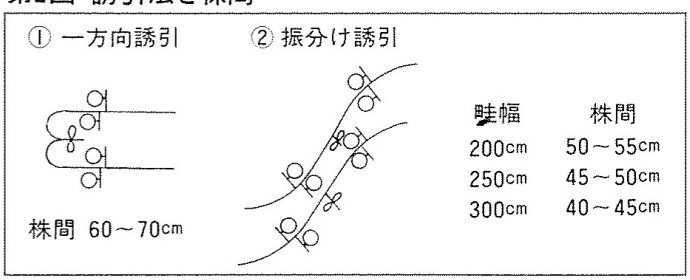
■**施肥**　グリムは白皮のメロンとしては雌花の着生は安定しているが、ネット系品種にくらべると土壌水分や肥料に敏感で過繁茂、雌花の着生不良等になりやすいので、特に窒素過多にならないよう注意する。

標準施肥量(10a当り成分量)
- N……6～8 kg
- P……15～25 kg
- K……8～12 kg
- Ca……50～100kg
- 完熟堆肥……2～3 t

■**栽植密度**　豊円で大玉に仕上げるためには株間を広くすることが大切で、着果節以上のつる間隔は30cm以上とする。(第2図参照)

■**定植とその後の管理**　定植時の地温18℃以上(夜間最低地温15℃以上)、最低気温10℃以上を維持できる条件で定植し、植傷みしないよう温度管理と土壌水分管理に留意する。植傷みや高温多湿の管理は雌花の着生や充実を悪くするので、夜間最低気温12～15℃、昼間の最高気温28～30℃を目標に管理する。

第2図 誘引法と株間



■**着果節位と整枝**　子づるの摘心は25節前後、12～16節の間に2果着果させる。着果節以下の孫づるは元から摘除、着果枝は2葉の上で摘心、着果節以上は一葉の上で摘心し先端2～3本は放任する。その後伸びてくる枝は過繁茂にならない程度に整枝する。

■**着果方法**　好条件だと蜜蜂交配でも着果するが、より着果を安定させるためトマトトーン(20～40倍)とジベレリン(200ppm)の混合液を開花当日および開花前日の子房に噴霧し一斉着果させ、鶏卵大に肥大した時に2果を残し摘果し、すみやかにマットを敷く。

■**潅水**　早生品種で果実の肥大期間は開花後25日くらいと短かいので、この間に十分肥大できるよう着果を確認したら遅れないよう潅水する。肥大期間は乾燥しないよう適度に潅水し、25日以後は収穫時までに徐々に乾燥するよう水切りをする。

■**収穫**　成熟日数は気温、日照量、栄養状態等で異るが、着果枝の葉の枯れ、果皮の淡緑から乳白色への変化、ヘタの色の緑から白黄色への変化等外観の変化と試食、糖度検査、着果後日数等で総合的に判断する。開花日、ホルモン処理日を記録しておくことが大切である。

■**病害虫の防除**　メロンに発生する病害虫全般に対応が必要で、特に注意を要するものは、根こぶ線虫(ネマトーダ)、ウドンコ病、ベト病、キャンカー(つる枯病)等で、つる割病(フザリュウム)の汚染地帯では、抵抗性台木園研2号(共台)に接木する。

■**汚斑点対策**　白皮のメロンは窒素過多、多湿、マット敷の遅れ、薬害等が原因で汚斑点が出ることがある。特に肥大期の殺虫剤や展着剤の入った薬剤の散布、多潅水等が汚斑点の原因となることが多いので注意する。